

聖徳太子 イメージの成立

だれもがその顔を知っている歴史上の人物、聖徳太子。様々なエピソードとともに語られる太子のイメージは、人々がどのような目的で、太子にどのような希望を託し、つくられていったものだろうか。仏教と深く結びついた太子信仰、そして浄土教と融合した太子信仰。その所産としての聖徳太子像を考えてみた。

浄土真宗の開祖親鸞は、聖徳太子を「和国の教主」と言っております。「教主」というのは釈迦の意味で、太子を日本仏教の祖と呼んでいるのです。親鸞自身、強烈な太子信仰を持っており、浄土真宗系の寺院では、みずらで香炉を捧げた聖徳太子孝養像が多くつくられています。日本の聖徳太子像の七割が、みずらの太子孝養像なのは、浄土真宗の影響だと言われています。

空海の真言宗では、空海は聖徳太子の生まれ変わりだという「聖徳太子後身説」を打ち出しています。また、中国の慧思（えし）を祖とする天台宗では、慧思の生まれ変わりが

太子と結びつき 仏教を広める

聖徳太子で、その玄孫が最澄であるという話があります。なぜ各宗派が、太子の前身説や後身説で太子と結びつく傾向を持ったのでしょうか。

鎌倉という新仏教の時代は、蒙古襲来により神国意識が強まり、神道系の人々が非常に力を得ました。仏教はもともと外来の宗教ですから、仏教者は危機感を抱きました。釈迦の説いた宗教が土着の宗教として根づくためには、釈迦に匹敵する人物の存在が必要でした。その人物こそが、仏教の外にいて仏教を保護したという伝承を持つ聖徳太子だったのです。

それで、太子は仏教のあらゆる宗派の中で、高い位置を占める日本史上最も有名な人物であるわけです。

太子信仰 最初の高まりは 八世紀、奈良時代

聖徳太子という名前の初出は、八世紀の初頭、飛鳥にある法起寺の露盤銘（ろばんめい）にみえます。

七二〇年にできた『日本書紀』の中でも、豊聡耳皇子（とよとみみこの）の名の由来になった一〇人の

10月28日(日)

太子町立
万葉ホール

武田 佐知子

●たけだ・さちこ●

大阪外国語大学教授。おもな著書に「古代国家の形成と衣服制一袴と貫頭衣一」（吉川弘文館）、「信仰の王権 聖徳太子」（中公新書）など。サントリ学芸賞、浜田青陵賞受賞。



聖徳太子および二王子像
(唐本御影)
(宮内庁提供)

「発見」



声を聞き分けたという話など、超能力的な太子の力が書かれているのは、太子信仰が高まった時代の記述だからです。

太子信仰は、聖徳太子の没後まもなく芽生えています。太子の子、山背大兄王が蘇我氏に殺されるという悲劇が、太子信仰に結びついていったのでしょうか。

太子信仰の最初の大きな波は、八世紀、奈良時代にやってきました。これは法隆寺僧、行信（ぎょうしん）が火付け役で、この頃「聖徳太子および二王子像」が描かれました。いわゆる「唐本御影（とうほんみえい）」で、紙幣の元絵になったものです。当時、絵や彫刻の人物はすべて信仰の対象でした。鑑真像や行信像のように、高僧が対象になっていたの、俗人である太子が描かれたという点と自体が、太子信仰の裏付けになる

でしょう。

また、仏様と同じ三尊形式であることも信仰の対象であったという証拠の一つです。

この画像の太子が本物かどうか疑われたこともあったのですが、私は確実に太子であると思っています。このことについては、拙著『信仰の王権 聖徳太子』（中公新書）に詳しく記しています。

衣装風俗は太子の時代のもではありません。太子の時代では成人しなくてもみずらを結みます。みずらになくなったのは、天武朝になってからです。つまり、この絵は八世紀の風俗を描いたもので、この時代は時代考証をしなかったのです。時代考証が厳密に行われるようになったのは明治以降のことです。

同じ八世紀に、太子の一生を描いた「聖徳太子絵伝」がつくられています。母間人皇后の夢の中で、金色の僧がお腹を借りたいと申し出て、その後太子を懐妊したとか、太子が二歳のとき掌中から仏舍利が現れたという話などは、すべて釈迦の伝説をそのまま太子になぞらえた形で、太子の伝説が生まれていることがわかります。

保元の乱を起こした藤原頼長の日記「台記」には、四天王寺で太子像

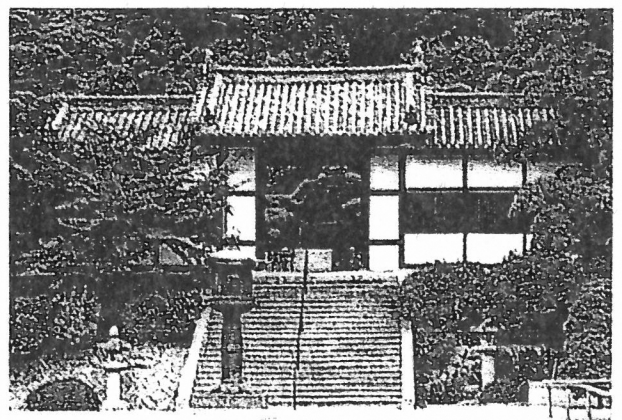
に「自分を摂政関白にしてくれたら、十七条憲法に則った政治を行う」と願をかけた話や父親が太子の衾（ふすま）を切り取ってお守りにしようとした話などが書かれており、当時の貴族層にとっても、太子信仰が高まっていたことが知れます。

未来記創作で 四天王寺が 太子信仰の中心に

科長（しなが）の御廟が最初に史料に現れるのは、一遍上人の業績を描いた「一遍聖絵」という絵巻物です。一二八六年に一遍が御廟に参籠したときの様子が描かれています。

叡福寺が最初に史料に現れるのは、九九三年。法隆寺僧、康仁（こうじん）が御廟に入り太子の遺体を実検した話や、康仁は太子の舎人（とねり）、調子丸の二代目の子孫にあたる話が書かれています。これを書いた法隆寺僧、顕真は康仁の八代目の子孫なので、どうも自分自身の血統の正当性を主張しようとして、創作したものと考えられます。

実際、平安時代の末期に、四天王寺の僧が太子廟の所在は不明であると書いているのです。



叡福寺

聖徳太子の墓については一〇二四年、「延喜式」諸陵式に「磯長墓が太子墓である」という記述があり、これに初めて四天王寺が目をつけるのです。

このわずか三〇年後に、叡福寺でメノウ石と言われる「太子御記文」が発見されます。太子の未来記の一つで、「太子の没後四三〇余年で、この記文が出現し、時の国王、大臣が寺塔を發起して、仏法を願求」と書かれました。実際に発見されたのが太子没後四三二年目というのは、あまりにもできすぎた話です。メノウ石の出現は四天王寺の画策ではないかと、私は思うのです。



四天王寺 石の鳥居

未来記の中で最古のものは「四天王寺御手印縁起」です。これには四天王寺に都合のよいことがたくさん書かれており、とくに「都の東に寺を建てる人は自分の生まれ変わり」という記述には、藤原道長が法成寺を都の東に建てた直後であったため、道長が非常に喜び、四天王寺に肩入れするようになります。こうして、四天王寺は一躍太子信仰の中心地となったのです。

当時、四天王寺は浄土教とも結びついて、極楽浄土の東門は四天王寺の西門であるという考え方がありました。四天王寺が浄土教と太子信仰を合体させて、仏教寺院として一大勢力を握るきっかけとなったのが、「四天王寺御手印縁起」なのです。これは明らかに偽作です。最高権力者の道長に取り入って、四天王寺の

隆盛を導いたのです。メノウ石の御記文も、四天王寺が中央に報告しているのです。叡福寺に堂塔伽藍を建てるために、中央の貴族の寄進を導き出そうとしたのでしょう。

さらにもう一つ、太子廟から未来記「太子廟窟傷（くつげ）」が見つかったというのです。そこには「私は救世観音であるから西方浄土に帰る。母は阿弥陀如来で、妻は勢至菩薩である」と書かれています。太子の墓は三骨一廟と称され、間人皇后と膳郎女の三人が合葬されています。つまり、太子廟を拝めば阿弥陀三尊をも拝むことになるのです。

太子信仰と浄土教を融合させたのは、当時そのどちらにも多くの熱狂的な信者がいたという裏付けにはなりません。太子廟窟傷のお陰で、叡福寺は浄土教の聖地としても位置づけられていきました。

一一〇八年、四天王寺西門で念仏を修め、願い通り科長の太子墓で往生したという永暹（えいらい）の話は、一二世紀初頭にすでに叡福寺における太子信仰と浄土教との融合が実現していたことを示すものです。私はこの背後に、当時の貴族層が熱烈に持っていた浄土願生思想と太子信仰の二つの信仰形態を読みとっていきたいと思うのです。



フォルクローレ音楽

♪アンデスの風
スカソッコ

プロフィール
南米ペルー・フォルクローレ・グループ。「スカソッコ」とは、アンデスのケチュア語で「温かい心」の意味。メンバー全員がペルーの古都クスコの出身。1984年、大阪で結成。コンサート・ライブ活動のほか、学校での音楽鑑賞会ではケーナをつくるワークショップも行い、音楽を通してペルーやアンデス地方の文化・生活を紹介している。合衆国、エストニアなど、海外の活動も広がっている。

見たことのない異国の珍しい楽器が並ぶステージに、有名なインカの地上絵が白で描かれた真っ赤なボンチョをまとったメンバーが登場。明るく本物のフォルクローレ（アンデス地方の音楽）が始まりました。

はじめのうちは、胸の前で小さく、大人しくたたいていた観客の手拍子も、プログラムにはなかった日本の歌「花」を会場全員で、

「泣きなーさーい、笑いなーさーい」

と声を合わせてからは、手拍子も頭の上で大きくはずんでいました。

「コンドルは飛んで行く」のイントロで耳馴染みのケーナやサンポーニャの楽器は、日本人の琴線に心地よく響き、アンデスの大自然から生まれた音楽は、ことのほか日本人と相性がいいことを実感しました。

アンコール曲の「花祭り」まで、大盛り上がりのコンサートでした。

おもな曲目

- PACHACUTEQ パチャクテク
- CUANDO TE VAS 去りゆく時
- EL CONDOR PASA コンドルが飛んで行く
- CANTO VITAL カント・ビタル
- LATIRAMERICA ラティールアメリカ

信仰の王権 聖徳太子

古本屋で見つけ、本の表題と副題にある「太子像をよみとく」から聖徳太子信仰が書かれているかと思ったが、図像学のようなものであった。旧一万円札にあった聖徳太子の肖像画の元は「唐本御影」と呼ばれる宮内庁管理の御物である。何らかの理由で一万円札の画は福沢諭吉に代わり、その直後にその御物は太子と縁のない川原寺からもたらされたという学説が出た。実はこの説は誤りだったが、唐本御影の太子像は本物かという議論が残った。



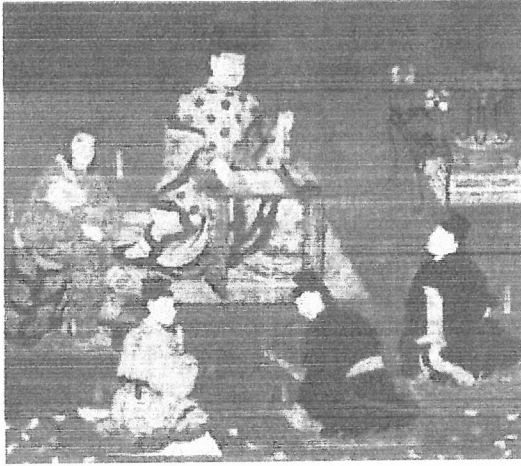
聖徳太子の生年は 574 年とされているが、唐本御影は 8 世紀に官営工房で描かれた高級美術品である。天平美人の代表となっている「鳥毛立女屏風」と同種の作品であった。11 世紀に橘寺から法隆寺へ移され、鎌倉時代になって勝月房慶政（九条道家の兄と言われる）と顕真によって唐本御影は表装替えがなされて、京都の貴族へ出開帳された。当時は太子信仰が広がっており、勸進のツールに使われたのである。更に、江戸時代になって再度の表装替えにより明代の絹布となった。これら法隆寺の宝物は明治時代に奈良博物館—東大寺尊勝院—東京上野博物館を経て、大戦後は国立博物館にあったが、今は皇居東御苑尚蔵館に収められている。研究調査の対象となり難しい物となった。

唐本御影の太子像が 8 世紀の作品だとする理由は、その服装にあった。長屋王邸とされる屋敷跡の北側溝から楼閣山水図木簡が出土し、そこに描かれた男性の着る服と太子の服とが同一であることが見て取れる。また、律令の衣服令に規定される頭巾も太子像とよく似ている。科学的にも唐本御影の料紙の分析から 8 世紀とされた。このように唐本御影は太子の時代から二百年後に描かれており、唐本御影が誰を描いているのかも分からないものであった。これを決定付けたのが、鎌倉期に顕真が京都へ持って上がった時に、近衛兼経から恰も本物であるかのようなお墨付きをもらったことであった。その前まで法隆寺側も唐人による書風を怪しんでいて、それを武田氏は大江親通の旅行記『七大寺巡礼私記』を通して読み解くのである。

本は更に 2 つの聖徳太子像を取り上げる。その一つは太子孝養像という少年時代の太子が香炉をもつ像である。当時の少年は「束髪於額（ひさごばな）」という髪型でなければならないのに、太子は青年の「みづら」の髪型で描かれたり彫ってある。これ平安時代後期に袈裟を付けるようになった。これは慶滋保胤の『日本往生極楽記』に少年太子が袈裟を付



けていたと書いたからであった。続いて柄香炉を持つようになった。また、鎌倉期に顕真が『聖徳太子伝私記』を記して舍利信仰を広めることで、香炉を持たない合掌像ができた。その手の間から舍利がコボれる事になっていたからである。



今ひとつの聖徳太子の像は、法隆寺にある聖徳太子坐像「聖霊院御影」という摂政時の姿である。特徴的なのが、冕冠と呼ばれる中国の皇帝が儀式で用いる金の簾付の冠をかむっている事である。しかもその下には平安貴族が付けた巾子冠をかむっている。巾子冠の上に冕冠を付けるのは物理的に不可能であり、イメージだけの姿であった。これが、勝鬘経講讚御影という講師姿の画へと受け継がれた。

聖徳太子に皇帝のイメージが付与されたのである。後の勝鬘経講讚太子像や摂政像は袈裟を付けたたり帯刀するようになる。面白いのが、清浄光寺蔵の後醍醐天皇像も冕冠をかむっていることである。武田氏は「後醍醐天皇の異形性は、聖徳太子の異形性であったというべきであろう」と付ける。この一言があったので、この本を紹介する気になった。やっぱり網野を読まねばなるまい。

[#262: 08.12.27]



唐本御影（トウホンミエイ）

唐本御影は、聖徳太子を描いた最古のものと伝えられる肖像画。「聖徳太子及び二王子像」とも称される。百済の阿佐太子(アサタイシ)の前に現れた姿を描いたとの伝説により阿佐太子御影とも呼ばれる。

二人の王子は、右前方(向かって左)が弟の殖粟皇子(エグリノミコ)、左後方(向かって右)が息子の山背大兄王とされる。

この絵の制作年代は、冠に笏を持った姿は、飛鳥時代の人物の服装とは考えられていない。人物の冠、服装などの様式から、早くとも八世紀と考えられる。

殖粟皇子は、用明天皇の第5皇子。母は穴穂部間人皇女。

山背大兄王は、聖徳太子の息子。母は刀自古郎女。